

2020年6月28日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「教会と隣人」

聖書：ローマの信徒への手紙15:1～6

パウロの神学には、律法の「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛せよ」、「隣人を愛せよ」がある。ローマの教会へそのことの重要性を説いている。「心を合わせ」て礼拝を捧げ、「声をそろえて」主を賛美する。そして「わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方を、たたえさせてくださいますように」(ロマ15:6)。1～3節には「隣人愛」とは何かを記す。私たちはつい自分が中心で自分を満足させようと働く。それでは聖書が教える「隣人愛」からは遠ざかってしまう。「キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした」とあり、「あなたをそしめる者のそしりが、わたしにふりかかった」。この引用(詩編69:10)の意味は、イエスは神の子でありながら、神の力を自分のためには使わず、隣人のために注いで行く。しかし人々からはののしられ、されど十字架へと向かわれた。神へのそしりがイエスに降りかかったということになる。聖書が教える「隣人愛」とは何かを深めて行きたい。ロマ書は、何も教会の中のことにのみ限定しているのではなく、地域とのかかわりの中でも「隣人」とは何かを記している。

インド独立の父として知られているマハトマ・ガンディーが「隣人の原理」について語っている。ガンディーは、鉄道の存在を批判した。彼の著書『真の独立への道』の中で、「鉄道で邪悪が広がります」と言っている。近代のスピード化を懐疑的に見ていた。何事においてもスピード化して行くことが正しいと見ている社会に対して誤りであると見た。人々はゆっくり歩くことを忘れ、早く、遠くへ行くことに価値を見出した。その結果、農家は高く売れるところに穀物を売るようになり、物があふれる場所と、物がなくて餓死する場所が出てくると。そしてこうも言う。人の移動とともに「感染症」があつという間に拡大するようになったと。「良いものはカタツムリのように進むのです」と。現代社会をよく言い当てている。「隣人の原理」は、近くにいる人との支え合いを重視し、地産地消を推進した。地域のもものは地域で消費する。都市住民には、近隣の村落から農作物を買う義務がある。生産者にも、消費者にも大切な役割がある。隣人の支援を優先しなければ、世界はバランスを失うことになる。ガンディーの言葉は、現在の真逆の世界を鋭く言い当てている。ガンディーの「隣人の原理」は当然ながらキリストの教えから得たものであろう。

パウロの「隣人愛」もまた、当然ながら主イエスから学んだもの。イエスのこのような教えを基礎として、教会は、教会として成り立つ。私たちの教会は、隣人に向き合っているだろうか？私たちの教会にできる、またふさわしい、隣人との向き合い方を見出して行きたい。(神谷)